

昭和十年五月廿三日第三種郵便物認可（毎月一回一日發行）
昭和二十八年四月二十八日運輸省特別授受承認第三五二號
昭和二十八年七月廿五日印刷 昭和二十八年八月一日發行

第十九卷 八月號

淨土



蓮久

八月號

幽 靈 噺

昔から、夏は幽霊のシーズンと相場が決つてゐるが、それでなくとも近頃は「心靈研究」が盛んで、幽霊の寫眞やら、幽霊の指紋やらが珍重されている。幽霊の正體が枯尾花であるかどうかは知らないが、幽霊が本當にいたとしたならば、一體、宗教はどうなるか、そろそろ眞劍に考えてみることも必要だろう。目下流行の新興宗教の大部分は、霊のお告げとか、霊ののり移りだとかを表看板にしているが、出て來た幽霊がはつきりと、ああしろのこうしろのと注文するのなら、その通りにしていれば間違ひはない。そうすれば世の中に病人も貧乏人もうまくすれば死人もなくなるだろう。そうなつて來ると、何を好んで、むづかしい佛道修行に浮身をやつし、やれ禪だ三昧だ、念佛だ安心だとさわぎまわることがあろうか。それよりも、町の祈禱師、横丁の巫女のところへ行つて、お經の代りに、幽霊の御氣嫌を損じないように、幽霊が何を欲しがつているか、先まわりしてお伺いして貰えばよい。

そうすれば、「うらめしい」といつて出て來ずに、「ありがとう」といつて握手の一つもして呉れるだろう。だが、そうなれば宗教はどこかへ消し飛んで、世間一般の才智のみが残ることだろう。(竹中)

淨 土 八 月 號 目 次

幸福と往生……………吉田絃二郎(1)

十善法語……………眞野正順(4)

佛……………寛克彦(19)

供養……………新保義道(22)

意日沒禮讚……………吉田定久(8)

心……………藤田寛海(25)

古寺瓜蓮の常福寺……………大橋俊雄(14)

モンテンルパの夜は明けて……………佐々木孝丸(16)

初心の方に……………高木晴子(20)

死の巷をさまよいつゝ……………内山知也(11)

願はしきこと……………慈光房(20)

女御出家……………吉賀敬吾(32)

一枚起請文……………佐藤賢順(28)

淨土俳壇……………(7) 芝園だより

幸福と往生



吉田 絃二郎

今年もまた庭の片隅に紫陽花が咲くころとなつた。紫陽花は朝露に重く頭を垂れて、もの案じ顔なる風情といひ、夢見るやうな花の色といひ、人のこゝろをさびしい世界に惹きつける花である。

四十年も前のことである。わたくしは自殺した友人が自殺の前夜まで泊つてゐた稻毛の海岸の旅館を訪ねて行つた。そしてかれが生死の問題に悩んでゐたその座敷に坐つた。その庭にも紫陽花が咲いてゐた。その日の午後わたくしたちは千葉の町外れの火葬場にかれのなきがらを運んで行つた。

二十年も前のことである。妻が東京に行つたかへりにと一輪咲いた紫陽花を買つて来て庭の片隅に植ゑた。紫陽花のさかりのところ妻は死んだ。庭の紫陽花は今では百以上の花を持つてゐる。

紫陽花は年ごとに咲いては故人を思はせる。

紫陽花を見ることは苦しい。しかも紫陽花が咲かなか

つたら一層さびしいことであらう。

病める人にとつては眠つてゐる間こそ天國であり、極樂である。

眠つてゐる間には健康な自分自身にかへつて山を越え川を渡つてゐる。夢こそ救ひである。

しかし病が長くなると、山野を跋涉するやうな夢を見ることも次第にすくなくなる。

以前はわたくしは鳥のやうに空を飛んで行く夢をたびたび見たが、このごろはめつたにそんな夢を見なくなつた。

朝になつて眼がさめると同時に病といふものゝ苦しさをびしさが頭をもたげて来る。

病めるものゝ苦しさ、さびしさはかれ自身の他にはわからない。人は一人で生まれて来て、一人で死んで行かねばならぬやうに、病の苦しさもさびしさもまた一人で

忍ばなければならぬであらう。

かつて自分の周囲にあつた母や子や妻を、心ゆくまで看護もしないで死なせたことを思つては、腸を斷つ思ひをするのが人間の常である。

死んで行く者の悲しみ、残る者の悲しみ、人生はいづれにしても悲しみから道がれることはできない。しかし行く者も送る者もやがては等しく永劫の眠りのなかに歸ることが出来る。

「眠ることは嬉しい。しかし永劫の眠りはさらに嬉しい」かう言つた古人のこゝろを掬み分けるためには、まだまだ人生を、病を苦しまなければならぬ。

このごろはたいていの人々が人生について疑ひといふものを持たなくなつた。人生を哲學的に、宗教的に考へ苦しむことをしなくなつた。

たいていの人々が人生の目的は幸福な生活にあるやうに考へて、すこしでも長く生き、すこしでも幸福な生活を

送りたいと考へてゐる。

悲惨な敗戦の結果、いつまた恐ろしい戦争がおこるかも知れないといふ不安からと、はなやかなアメリカ人の生活に魅せられたことなどの原因からして、たゞ一筋に幸福な生活を追ふことに人生のすべてを賭けてゐる。無理もないが、あまりにさびしい。人間は幸福な生活のみで生きられるものではない。

幸福な生活のみに頼つてゐる人は死ぬことを悲しむ。

無論死ぬことは誰れにも悲しい。しかしその悲しみは親しい人たちに別るゝ悲しみであり、わたくしたちをはぐくんでくれた大自然と別るゝことの悲しみであらねばならぬ。幸福な生活のみに頼つてゐる人の臨終の悲しみには執着がある。死から逃げようとするもがきがある。はたの見る眼も氣の毒である。

凡夫の身としてはあまり幸福であることは往生のさま

たげである。一步一步幸福の石を積み重ねるたんびに往生の道を塞ぐわけである。

一步一步幸福から遠ざかる時、わたくしたちは往生の道に近づくであらう。

八月も半ば過ぐれば朝夕は秋風が立つ。田舎では陰暦のお盆である。迎へ火を焚くにも陰暦のお盆の方が秋めいてゐてあはれがある。

送り火を焚いて十萬億土の旅をかへる佛たちを送るあはれはなほさらのことである。

お盆は最も美しい東洋的な生活の詩であり、童話である。

八月の武蔵野を歩くと茄子や胡瓜で作つた佛さまの馬が小徑に置かれてあるのを見る。

お盆は美しい童話だ。尊い悠久の詩だ。



慈雲尊者の

十善法語 (二)

眞野正順

昨日申しました様に、人間はその本性、珠の如く清く美しいものであると云ふ。それならば、なぜ、この人間の現實は何時も争ひに満ち、悩みが絶えないのであるか。人間は、その本性のごとく生きれば善、私意に生きれば惡、と云ふけれど、この世に生きる限り、こゝにある私を中心として生きて行かねばならぬ。その限り、どうしても私心はわいてくる。そして悩みに墮ち惡に陥ちる。どうしたら良いのであるか。

慈雲尊者によりますと、實は、このような悩ましい慾望の起つてくる事にこそ、人生の深い意味があるのであつて、それは、たしかに悩みを招く直接の原因ではあるがまた、これに依つて、人の眞實の美しい本性が、初めて

開けてくる發端でもある。こゝに目をつけねばならぬ。人生の尊い輝きは、實にこの卑しい欲情をバネとして躍り出てくる。こゝに人生の言葉に盡しがたき微妙な意味が横はる、と説かれるのであります。

尊者は、こゝに、有名な「摩尼」の寶珠譬を持つて來られます。摩尼の寶珠には色は無い。無色透明、どこまでも澄み切つておる。ところが其處に太陽の光がかゝりますと、忽ち光は屈折分析して、美しい五色のあやが珠の表面に現はれてくる。もとより太陽の光には色は無い。無かつた光から、忽ち美しい五色が出てくる。この色と光とはハッキリ違つているのであるけれども、實は違つたものではない。光の内容を最もよく現はして來た

のが五色である。光の隠れた内容が寶珠に分析されて、ハッキリ鮮明に現はれて來たのであります。

人間もまた然うであります。その本性は、手に取る事も出來ず、目に見る事も出來ない。色無き光の如きものである。それが、この現實の欲望の中に出てくる。私心わたくしをかぶつて出てくる。この私の現實の卑しい欲望と、人の本性とは確かに違つてゐる。雪と炭である、けれども實は違つてゐない。夫れに依て、見えざる本性が、目に見えてこゝに現はれてくる。云はゞ、その機會であります。人は、この惱み多き生活の苦しみの中に於てこそ、却つてよく、美しい本性を現すことが出来るのです。

人間の本性が、たゞそれだけで現はれるといふ事は決してない。たゞ機會を待つて現はれる。欲望はその機會である。然もたゞ出てくるのではない。それをバネとして、のつびきならぬ、姿をとつて生々と現はれてくる。尊者の言葉によると、「倍增」する。二倍三倍になつて現はれてくる。人生の面白味は實にこゝにある。

『有情に命根あり。人々保著して寤寐にも忘れぬ。わが戒善これによりて倍增する。一切損害の行、こゝに

解脱するじや。』

人には生命がある。人である限り、生命を愛する心は何物よりも強い。この強い生命を守る欲求から、やがて生命を傷けることの一切を防がんとする心が起つてくる。殺さころさする心であります。これがやがて成長して、ひろく一切の生命の上に伸びて行く事によつて、初めて美しい平和の世界が開かれて來る。世界平和の根元は、實は、わが内心の生命を愛する本能である。この本能をバネとして跳躍台として美しい平和世界が現はれてくる。只今でも、最も強く平和を冀こいねがふ者は、悲慘なる戦争の爲に、最愛なる我兒を失つた母達であると云はれます。我兒の生命を嘆き、いとほしむ切なる心がバネとなつて、世界の永久平和が強く推進されてくる。

然し、この心はたゞ本能が成長したものではありません。そう云ふものなら、本能と共に直ぐぐら／＼して消えて仕舞いましょう。そうでなくて人間の中に、既に具つてゐる本性であります。すべて生有ある者、生きとし生ける者を我と隔てなき者とする心、我兒とする心。それは實は人に内在する永遠の本性であります。それが本能

を機會として、丁度雲が切れて月が現はれてくる様に、次第に現はれてくる。

『一切衆生は我子なるに由て、一切有命の者に對すれば、不殺生戒と名くる。こゝに我子と云ふは、世間に親子の間は睦まじきものなるに由て、これに比べて説いた言葉ぢや。實は一切衆生の心念思慮を以て自己の心とすることじや。自心と一切衆生と平等平等にして元來へだて無きじや。一切有命の者が眼に遮らねば止みね。眼にさへぎれば必ず慈悲心生ずる。是を菩薩と云ふ。この菩薩の心を戒と名くる。この菩薩の心は一切衆生に本來具足したもののなれども、煩惱業障深厚なるに由て、暫らく現ぜぬのみじや。』

同様にまた人には物欲があります。いつも財を求めて止まない。その爲なら晝夜奔走してどんな苦勞をしても厭はない。この強い本能がまた人間、惡を起し來る根元であります。然し是を機會として、他の所有を犯さざる心、「盜まざる心」が起つてくる。我が物を獲んとする勞苦が切實であるだけ、また互に他を犯しがたき心が起るのです。

『有情に内外の資縁あり。日夜奔走して求めて厭はぬ。わが戒善、これに由つて倍增する。一切侵奪の行こゝに解脱するじや。』

この心は、やがて、この世界に在りとあらゆる一切の物を「わが物」として感ずる心でありましてこの心に由つて、社會の秩序は初めて形成されてくるのです。

この様にして、また、人に具はる男女の愛情は、やがて轉じて、人倫の道を正し天命に順ずる心となり。また偽り欺く心も、それを機會として、眞理に順ふ正しき生活を開いてくる。——この様な順序で、尊者は、殺生、偷盜、邪淫、妄語、綺語、惡口、兩舌、貪、瞋、邪見、の十種の戒を説くのであります。即ち十善であります。

考へて見ると人生は實に微妙なものです。こゝにある我々の醜い欲望にも二つの道がついている。

一つは、これを失はじと狭くこの中に執着する心です。こゝにある我も物も、それが何時までも、永遠に存續するものであるかの如く、その外の形のまゝに、必死になつてこれに執着追及する。その事に由て、人はかへつて狭く欲望の中に囚はれ、いよ／＼窮屈にひしめきな

がら、次第に人間「退歩の道」をたどる。

も一つの道はそうではない。むしろこの目前の欲望を
バネとして、高くより廣い世界へと躍り出る。かく躍り
出る事によつて、隠れていた自分の尊い天分、本性が躍
如として現はれてくる。人間「向上の道」であります。
人間、手を束ねてその天分が現はれて来るためしはな
い。すべて機會を待つ、目前に與へられた事實、境遇に
向ひあい、正しくそれに生き貫く事によつて、それがバ
ネとなつて、隠れた天分本性が躍り出てくる。これが生
命の本道であります。尊者はこの人生の機微を語られる
のであります。(つづく)

投稿募集

○俳句、感想、紹介したい話、我寺、我村の美はしい佛教
行事等、隨時、お送り下さい

○送先

東京都港区芝公園五ノ十

法然上人鑽仰會

編集部

●●●淨土俳壇●●●

高木晴子選

泳ぎゐる人より波の涼しけれ

「虚子」

片陰をえらびて往くよ長谷の道

「桃里」

次々に早乙女顔を上げて見る

「梨三」

四時まではまだ中々よ金魚玉

「立子」

いつもこゝに端居の心定まりて

「虚子」

下蔭に憩ひし人の早やかはり

「餅花」

睡蓮の姉妹の如く並び咲き

「虎兒」

まき上げし古き簾の廣間かな

「初瀬」

選者句

冷酒はガラスの瓶にグラス添へ

端居する人も無く風吹き通る

(大佛句會にて)

冷麥や旅の二階の暮れ初めし

東京 戸野倉砂城

草いきれ對岸の山石を切る

〃

幾星霜秘めて涼しき水の色

〃

佐久はみどり千曲は流れ人樂し

埼玉 川崎正男

ふと耳をすませば山に蟬が鳴く

〃

袋ぬれてリンゴの影がうつりけり

福島 眞野賢司

譯意
日沒禮讚

- 1、救いませ偉いなる、
佛陀みほと 教法くはふ 僧伽そうが
- 2、救いませ大いなる、
佛陀みほと 教法くはふ 僧伽そうが
- 3、救いませ彼の國の、
我われ いま 壽いもう 量はかり り無き、
- 4、救いませ彼の國の、
世よ の人々と我われ は今、
- 5、救いませ彼の國の、
世よ の人々と我われ は今、
- 6、救いませ彼の國の、
世よ の人々と我われ は今、
- 7、救いませ彼の國の、
世よ の人々と我われ は今、
- 8、救いませ彼の國の、
世よ の人々と我われ は今、
- 9、救いませ彼の國の、
世よ の人々と我われ は今、

釋迦牟尼佛を首とし、
この三寶を敬まいて、
國に往かんと願うなり。
國々首め三つの世の、
この三寶を敬まいて、
國に往かんと願うなり。
功徳に滿てる阿彌陀佛、
彼國に生きんと願う也。
無量光なる阿彌陀佛、
彼國に生きんと願う也。
無邊光なる阿彌陀佛、
彼國に生きんと願う也。
無碍光なる阿彌陀佛、
彼國に生きんと願う也。
無對光なる阿彌陀佛、
彼國に生きんと願う也。
炎王光なる阿彌陀佛、
彼國に生きんと願う也。
清淨光なる阿彌陀佛、
彼國に生きんと願う也。

願はしきこと

慈光房

降りつづいた梅雨の雨も、今朝はからりと晴れ、いかにもさわやかである。私は朝飯をすまして、縁側に椅子を持ちだし、雨に洗はれた、みどり色濃い庭を、しばらくの間ながめていた。朝風が心地よいまでにわが身にふれる。庭のむこうの竹藪は、風にゆられて大きく波打っている。ざあ／＼と音をたてながら、風のままに身をまかしている。彼等はみづからの姿勢を、固執しようとはしないで、風が吹けば風に乗つて、どこまでも頭をさげて、こだわることを知らない。本来、柔輓であればこそ、隨縁そのものであり得るのである。だからこそ無礙である。

○
柔輓と言へばなんとなく、女らしい感觸と

- 10、世の人々と我は今、救いましたませ彼の國の、
 11、世の人々と我は今、救いましたませ彼の國の、
 12、世の人々と我は今、救いましたませ彼の國の、
 13、世の人々と我は今、救いましたませ彼の國の、
 14、世の人々と我は今、救いましたませ彼の國の、
 15、世の人々と我は今、救いましたませ彼の國の、
 16、世の人々と我は今、救いましたませ彼の國の、
 17、世の人々と我は今、救いましたませ彼の國の、
 18、世の人々と我は今、救いましたませ彼の國の、
 19、世の人々と我は今、救いましたませ彼の國の、
 20、世の人々と我は今、救いましたませ彼の國の、
 21、世の人々と我は今、救いましたませ彼の國の、
- 彼國に生きんと願う也。
 歡喜光なる阿彌陀佛。
 彼國に生きんと願う也。
 智慧光なる阿彌陀佛。
 彼國に生きんと願う也。
 不斷光なる阿彌陀佛。
 彼國に生きんと願う也。
 難思光なる阿彌陀佛。
 彼國に生きんと願う也。
 無稱光なる阿彌陀佛。
 彼國に生きんと願う也。
 超日月の阿彌陀佛。
 彼國に生きんと願う也。
 功德に滿てる阿彌陀佛。
 望みの心いや増して、
 み佛護り給へかし、
 彼國に生きんと願う也。
 大悲溢るゝ觀世音。
 大智溢るゝ大勢至。
 淨き善積む大海衆。
 我善き友も世の人も、
 同じく佛土に生れんと
 救いましたませ改めん。
 罪の諸根を消し給い、
 安けく共に幸あれと、

ともに、しとやかさ、うるはいと言つた感じが湧いてくる。この語のひびきには、さも、もろく、弱々しいものが感ぜられるが、實は弾力性に富み、潤滑をみづからの誇りとするものである。

近頃の刻み煙草はどうかしらないが、配給をうけた戦後の刻みは、かさかさとかわばり、光澤までも失つていた。昔のような柔さはなく、もめばすぐ粉になりはてるような品物であつた。昔の刻みであれば、親指と人さし指とでつまんで、くり／＼ともめば、糸をまるめるように丸くなつてしまふ。一本一本の細長かつたものが、ただまるく形を變へてしまつただけで、みづからの本性を改めてはいない。まるめると言う縁にしたがい得るところこそ、柔軟の持つ力強さである。

○

人のからだも亦、老の坂をのぼる頃には、こわばつて柔軟性を缺くようになる。幼いき、若き時のように、みづからの五體を、自由自在に使いこなせなくなる。人の心にも亦柔軟性が換起せられる。こたわることとは柔軟の缺除と言へよう。

恒にぞ願ひ祈る時、
功徳に満てる彌陀佛と
守りの光と御手により、
懺悔し回向し願をし、
22、御佛たのむ功にて、
覺りの詩と功徳を、
眞實信する者は皆、
心の眼曇り霽れ、
23、菩提の華を樂しまん、
菩提得られしあゝ佛陀
願ひを回らし世の人と、
24、薩婆若遍ねしあゝ教法、
願ひを回らし世の人と、
25、怒り影なしあゝ僧伽
願ひを回らし世の人と、
26、世の人々と願わくは、
佛の教にいそしみて、
願ひを回らし世の人と、
27、世の人々の知るべきは、
世の人々の営みに、
命の燈火風に揺れ、
脱るゝ術の無き身もて、
人々强健なるの時、

勝れし縁の導きに、
あまたの聖人仰ぎ見て、
彼國に我を生かしめよ
ひたすら彌陀を仰ぐ也。
迷いの命終るとき、
備えし彌陀に觀えなん。
阿彌陀を仰ぎ奉り、
安けき國に生れては、
願ひぞ已る謹みて。
道心の歩み進めなん、
我は詩國に往かんとす。
智慧の罪開かなん、
我は詩國に往かんとす。
和合の榮え示さなん、
我は詩國に往かんとす。
意と口と身を淨め、
すべての聖人敬まわん
我は詩國に往かんとす。
日没無常の偈ぞ、
年月去るを忘れたり、
忙しき浮世定めなし、
など怠たりて恐れざる、
常住のみ國へ歸み往け。

(北海道上磯郡知門村 大乘寺住職
吉田 定久 謹譯)

ゆく雲の動くにも似よ大空の
高きにも似よわれ旅にあり
と言ひ、恩師、小笠原秀實先生のよまれた和
歌を思い出し、二、三回くちずさんでしまつ
た。なんと、さらりとした、わだかまりのな
い和歌ではないか。行く雲の動くように、他
にみづからを托し、みづからにたちこもらな
いことこそ、實に望ましい限りである。雨ふ
るもよし、日照るも亦よし「焚くほどは風が
もてくる落葉かな」で、隨縁のままに、ただ
すべてをよきに、よきにと受容し、處理して
ゆきたいものである。

○

小鳥のさえずりが朝風にのつて、閉された
雨からの開放を、さまたのしげに告げてく
る。水をふくんだ庭者は、ふつくらとふくら
み、いかにもやわらかさうである。竹藪はざ
あゝと音をたてながら、風に吹かれて波打
ちをつづけている。自然は私に語り、私は教
えをうけたような感じで一杯である。なんと
なく、考えさせられる一時を持ち得て、今朝
はかわす言葉も少く、わが内に省みることが
實に深い。

死の巷をさまよいつつ

内 山 知 也

豆の葉

夜明け、異様な物が咽喉の中に入り込んでくる夢を見ていた。餘りの息苦しさに、口を覆い乍ら、牀を出て焼跡の雑草の茂みに踰くまると、咳が止めどなく出て、身體は船酔の後の様に虚脱していた。口を覆っていた掌を朝の薄明りにかざして、そつと視ると、それは眞紅であつた。咳と共に足下の草の葉に、紅い血潮が點々と滴り落ち、胸の中を破れたポンプに似た音がして、血の泡がフツフツと湧き出して來た。

發作が終ると、心が不思議に靜かになつてそれから後悔に似た様々の感慨が襲いかゝり甘く苦い感傷の中に息苦しい胸が蕩揺した。だがそれも間もなく、病の深さと、萬が一にも生き難い痛瘍の自覺に失神を覺える程であつた。

「靜かに、落ちついて……寢ていなさるがい！ 死はすべてのものを休ませてくれる……死はわしらにとつて優しいものだ」

(ゴリーキー・どん底)

東京の三疊の焼跡のバラックに、靜かで臥り、突然の咯血の衝撃と死の恐怖と闘う。故郷に待つてゐる、母や父の悲しむ顔が泛ぶ。

あゝそれも術なき事だ。この様な忌まわしき病に罹り、異郷に血を吐く。卒業を明春に控えて、卒論はまだ半ばに到らない。あゝ年末迄生きられるであらうか。生きられるだけ生きなければならぬ。青ざめた軀に重い軍靴をつけて、病院にゆく。今日より離れ難くなつたマスクの熱苦しく白々しさを悲しみながら。(一九四九・九一・九)

鏡

呼吸が苦しい。胸の中にすさまじいゲロイッシュ(響音)。枕許の古い鏡で、蒼ざめた顔を見ると、そこには凄じい程に死相の漂つた鬚の脂が滲み、肉のこけた頬が、生臭い息を切なく吐いていた。こうやつて瘦せ衰えて死んでゆくんだな。枕の下から青い表紙の經文を取出して始めの方から一字一字讀む。

極重惡人唯稱佛 我亦在彼攝取中

煩惱障眼雖不見 大悲無倦常照我

あゝこの一つの文に含まれた佛の言葉は、罪多く行ひ誤てる懺悔の心の心を如何に救つて下さることか。私の様な重惡にして、煩惱の人並以上に多い者も救つて下さるのだろうか。それは皆佛の御心の裡にあり、常凡の思量することのできないものだ。經文を頭の下

に埋め乍ら、又苦しい息を吸つた。

(九・三〇)

晴れた日

こゝで死んでもいいのだと思う。ただ死に到る間の絶望には堪えなれない。

死ぬこと——何處に私は去つて行くのか。

私の信ずるみ佛の許にか。だが生きている唯今、私に與えられている問題は、今日明日を如何に生きるか、如何に死に就くかということとだ。絶望して、何もかにもに悲觀して、人の言葉を無視したり、人の氣持を悪くしたりしてはいけない。後に残る人々の心に、少しでも深く美しい印象を遺して死ぬことにしよう。(一〇・二三)

誕生日

雨が降る淋しい誕生日。看護婦だけが私に祝つてくれた。看護婦は種々と私を慰め力づけた後、書棚から「若い人」と「天の夕顔」を抜いて、「私つたら、借りるとお返しに仲々持つてこれませうよ。夜は睡いので同じ所ばかり読んでいます。」と笑つた。いつも明るく、清潔で、力づけてくれるこの看護婦に感謝しつつ、「いつでも。それまで起きら

れないでしようから。僕は。」と言つた。生まれて始めて病牀の中で誕生日を送つた。生まれる時からこう定められた運命という様なものがある様な氣がして慄然とした。外はまだ雨が降つている。(一一・一五)

メ モ

おそれ 七割

絶望 二割

希望 一割

このさゝやかなる希望に、明るい灯をともして下さい。このおそれと絶望の日々を明るく照して下さい。(一一・三〇)

殊壽不貳

半歳に亘る絶對安靜の日々。この間に會つた人は十人に足りない。この間に見た景色は室内と白い雪空に過ぎない。その間の日記は全くの空白となつた。その長い日々の中に様様の悲しみは時と共に薄れ、今はもう何も書くことはない。たゞ靜かに今日の日も生きる。窓の外には、臥つている自分に拘りなく變轉する世界がある。そこに再び迫りつくには、こうした迷いと苦しみを繰返している我と我身の未來可能性に取纏るより他にない。その

時まで、能う限りの行いを行いすまそう。石印版の孟子集註が枕許に落ちていた。漸く動く右手で表紙を捲ると、そこにはこんな文章があつた。

殊壽不貳。修身以俟之。(卷七・盡心)

(一九五〇四—一五)

梨の花

「白い花が咲いているね。何の花だろう。」と、醫師が言つた。注射が終つて醫師が立上ると、窓際に立つて暫く眺めている氣配だつた。さつき手擦りにつかまつて用を足した時廊下の窓からちらと見えたのは、その白い梨の花であつた。

「梨の花でしょう。」と答へながら、清少納言の『世にすさまじくあやしき物』といった言葉をちらと思ひ出していた。

「ほう、きれいなものだね。」

醫師は言葉を残して階段を下りていつた。母が、もう花は散りかけているよと言つた。

白い花、梨の花、誰も白々としたその色を讀めはしないが、力一杯に咲誇つている梨には、悟にも似た靜けさが漂つて、妖しい美しささえ感じさせる。梨の落ちる靜かな音、窓の外に耳をすますと、それが聞える様な氣が

する。

其土衆生、聞是音已、皆悉念佛、念法念僧。

(佛説阿彌陀經)(四・二五)

孤ならず

僕にあたえられたよろこびは僕一人のものではない。僕にあたえられる悲哀も、失望の呟きも、失つた青春の日々と病軀の嘆きも、たゞ僕一人だけのものではない。僕がよろこぶ時には、看護しつゝ喜ぶ母があり、僕の顔が歪む時には、悲しく顔をひそめる母がある。僕の聲の悲しむ時には父の聲は曇り、僕の手紙がひがむ時には、餘計に氣を使つて慰めてくれる友の便りがくる。そんな時に、僕は僕のためにのみ悲しんだり嘆いたりしてはいけないことをしみじみと知る。僕は孤りではないのだということ。(五・二二)

執着

病である時、生きる事が難い時、常に生命と共に愛着を感じる物を持つて、その所にたゞ一筋に繋がれて断ち難く執着していなければならぬ様な氣がする。何故なら、その一つさえなかつたら、激しい虚脱の嵐に吹き捲られて、心の中は淋しく堪え難い空洞になつ

てしまうから。釋尊の垂れ給う蜘蛛の糸にすがつて地獄から逃れようとした男の様に、細くても離し難いものを持つていなければならぬ。毎日臥つてゐる心を、今日こゝ迄支えて勵ましてくれたものは、生きたいと希う心と、小さなともすればと切れそうな執着の糸であつた様に思われる。(六・三〇)

山車

病氣を忘れる涼しい日。町はお祭りで山車が出て、馬鹿騒を奏でながら多くの人々が練り歩いている。窓邊に椅子を持ち出して通り過ぎる種々様々の山車を見ている。童兒が粉飾して太い綱をひいてゆく。山車の上には老人達が上つて何やら指圖をしている。遠くではつきり見えないが彼等は嬉しそうだ。山車の静かな移動と共に今日の日も又過ぎてゆく。

『我等は自ら往かない。運ばれてゆくのだ。宛も浮める物の如く。水怒れるや靜まれるやに依つて或は靜かに或は荒らかに。』

我等ハ見ルニ非ズヤ

人ソノ欲スル所ヲ知ラザルニシカモ絶エズ求メツ、アルヲ。

何處ニソノ重荷ヲ卸サンカト、ソノ處ヲ搜

シツ、アルヲ。ルクレシウス(モンテニユ) あゝ賑やかな音楽の裡に運ばねてゆく人々。そして病室の窓から去りゆく青春の日々を見送つてゐる病人。やつぱり皆運ばれてゐるのだ。(七・二三)

爆音

階下で猫に蚤をとつてやつてゐると、轟然と爆發音が起り、それが次から次へと續いて起つた。階段を上つて北側の窓から眺めると、壮大な白煙が天を押し、炸裂する花火の光が眼を射た。その日の夕刊に死者十名、重傷十二名花火工場の慘事と出ていた。禍は到る處に人を待つてゐる。そしてその爲に如何に多くの人が嘆き困窮する事だろう。

『死ハ到ル處ニアリ。賢キ神カク欲シタレバ。』

人ヨリ生命ヲ奪ヒ得ル人アリ。サレド、何人モ、人ヨリ死ヲ除クコトヲエズ。

死ニ到ル道ハ千條アリ。(セネカ)

人が遂には死より免かれなれないとしても、その爲に生涯の仕事をして終へないで死ぬ事は悲しい事だ。生命を長らへ、人に施し、世に盡し、靜かに音もなく世を終りたい。

(七・三二) (未完)

古寺訪問

瓜連うりづらの常福寺

大橋 俊雄

あたりの田畑には農民達が、甲斐々々しく立ち働いていた、どこからともなく地唄が聞えてくる。

笠間佐城の八重櫻、八重につぼんで九重色、花が笠間で、葉が水戸で、水戸で名代の仙波沼、上は常盤の大やしろ、音も響いて名も高い。

一行は石井博士と私で、二人は緑の木立の中を過ぎ、なれぬ旅路を瓜連常福寺にと急いだ。

常福寺はこの近郷の人たちには「さんやさま」と云つた方が知られているようだ、「さん

はれ、「法華文句」と云う書物に「寶吉祥月天子、大勢至之應作」と見えている。

水戸で水郡線に乗りかえ瓜連で下車すれば常福寺はほど近い、閑静の地に、曾つての檀林を偲ばせるかのように建てられていた。總門にくより、山門をすぎれば前方に清浄の地は廣く開けて阿彌陀堂形式の本堂が見える。

この寺は幾度びかの兵火と雷火に類焼して、今に昔ながらの檀林の面影を偲ぶことは出来ない。只僅かに「常福寺志」に載せられた規模によつて知るのみだが、檀林の面影を今に偲ぶことの出来るのは幾程かあらうか。元治元年（一六八四）の武田耕雲齋の兵火と明治四年の寺領朱印の没収は寺運の衰微を辿らしめ、その四十年九月には本堂が雷火のために焼失し、とり敢へず今迄の開山堂を移築したのが現在の本堂の由で、此堂は文化八年、元祖の六百回の忌辰に建てられたと云うから、一百五十年の歳月を閲しているわけだ。こんな事を住職は話されて、瓜連檀林の辿つた運命を語り、寺史は何時終るともなく續いて行く。又高野老住職は浄土宗全書編纂にたずさ

やさま」とは月待のことである。その昔、延文三年（一三五八）太田城主佐竹義敦は自から檀越となつて、了實上人を請ひて寺を創建された。これが常福寺で、了實の門から聖間が出、彼は後に浄土宗の第七祖と仰がれ、名實共に宗風の宣揚につとめられた學徳兼備の高僧であつた。その上人は應永二十七年（一四二〇）九月二十七日示寂なされたので、その逮夜と勢至菩薩の信仰である二十六夜尊とを結びつけて、「六夜尊」と云うているらしい。二十六夜待は臥待月をまつる月待で、月天子（目神）を供養して、其の功德によつて延命長壽、罪障息災、家門繁榮を願う行事で月天子は寶吉祥と云い、勢至菩薩の化現とい

わつた御仁で、檀林轉昇のことや、淺草源空寺の建築法、此處の御忌には各檀林の住持が交代で導師をつとめること等、檀林のことに關しても中々造詣が深い。そして言葉は尙もつづけられ、現下の宗風に憂うる心は固い。

近世淨土宗教團成立の上に大きな足跡を占める「常福寺の前途は聖岡中心の傳導場ではなくてはならない。常福寺は檀家寺ではなく十方檀越を布施源とするのであるから、これを生かした教化こそ此寺の使命なのです」と。かくて舊曆九月廿七日の開山忌は、近郷の十方檀越が集まつて勤修せられ、遠近の人々が本堂にお籠りする行事の話なども。

明けの鐘におどろかされて起き出でて見れば清々とした朝露が庭一面におりていた。昨夜お聞きした了譽上人や西譽上人の消息、そして幾多の古文書・什寶が机上に繰りひろげられ、宗史資料があらはれる。中にも西譽が其の師了譽に宛てた消息には、淨土宗の衰微し行くさまを憂うる情、切々たるものがあり、更に常福寺や師の近況を立ち寄つて聞きたいが武藏へ急ぐので、それも出来ないのは

秋歎の極み此上もないと云う師弟の情厚き程がうかがはれる消息は、只に頭が下るのみである。最後に拜見した拾遺古德傳は本願寺三世覺如撰の九卷本で、文章優雅にして、繪また優美、鎌倉末期の代表的繪詞傳にぞくし、蓋しまのあたり繪詞傳にまみえて元祖に接した思いがする。法然上人聖教全書に必要な部分の校合は二、三年來の懸案であつたが終つてほつとする。

常福寺を辭去して、裏手を下つて久慈川を渡れば、郡土村である。バスも途中までと云うのでつゝら折りの里餘の道をあわただしく香仙寺にたどる。直牒洞を拜ませていたゞくためである。聖岡が決疑鈔の註釋をたゞひたすらに續けていた頃、明徳四年(一三九三)、恰かも佐竹義秀の兵亂が起り、上人はこの亂を避けて阿彌陀山中の岩窟にこもり、巖窟の水滴に渴をいやし、乾柿と椎の實に飢餓を凌いで、兵亂にわざわざいされて手許に一として參考にすべき典籍のないにも拘らず、引文も暗記をたよりに、該博な知識と高邁な識見をもつて、刻苦精勵、縦横無盡に説いた。そして決疑鈔直牒十卷を完成したが故に此の岩窟を「直牒洞」と呼ぶのであるが、附近の人

々は「さんやさん(六夜尊)」と呼び、戰亂下の上人にとつては、此處が唯一の安全な書齋でもあつたのである。又洞は前後岩らしく窟内奥に阿彌陀三尊の像が浮彫りされている。

金銅のまばゆいばかりの阿彌陀三尊、香えんにつゝまれた古めかしいおごそかな三尊、それは朝に夕に拜む私達の心のより所でもある尊像であるが、岩壁にはゝえみをたゞえてまします如來は、又何となく落ち着きのある莊嚴な彌陀であつた。何時の間にか合掌し、念佛がもれている。其して心は五百年のありし昔に、思いを留めながら何時までも佇んでいた。この邊は善光寺と云うのだそうだ。して見ると香仙寺創建以前に、善光寺なる佛堂が、善光寺如來信仰の盛んであつた岡師以前に建てられていたのではあるまいか。文化財調査委員の報告によれば巖窟の掘られたのは千年許り前のことであると云うから。江戸幕府は直牒洞保護のために十三石二斗五升の寺地をよせていたといはれる。これも香華御宗門としての餘蘊であつたらう。

程遠からぬ所に聖岡上人産湯の井(誕生寺)があるとかお聞きした。

(大正大學淨土學研究室)

訪 問 記

モンテンプルの夜は明けて

佐々木孝丸

哀愁ふかい渡邊はま子の「モンテンプルの夜は明けて」のしらべは、敗戦の混迷せる気分と合して、厭が上にも悲哀をそゝり、街行く人々の胸をいためた。

大勢の動くところ、抗するすべもない多くの人々が、意志せざる罪を犯して、戦犯と言う得體の知れぬ汚名のもとに、斷頭臺の露と消えて行つた。いやしくも、同じ人間の、そして民族の血のつながりを感じる人は、一行の涙無くして、このことを語り得まい。

ヒッピン大統領は、去る六月二十七日、特赦の大令を發して、これ等死刑戦犯を無期とし、日本内地に於ける服役を許した。人道の本然と、平和への理念からすれば、又當然の事ながら、又一面、彼の國の人々の寛大な處置に感謝せねばならない。

且つて、佐々木先生が、モンテンプル死刑囚に取材した映畫に主演せられた事を聞いていたので、早速お伺ひして、色々とお話を聞くことにした。翻譯、劇作、演出に、更には、舞臺、スクリーンの上にて、華々しく活躍される先生は仲々多忙である。

◎感極まつて泣く

久里濱ではつひに機を失して拜眉出來ず、やつと新東寶撮影所で捉へることが出來た。スクリーンに出て来る華やかな舞臺に引きくらべて、撮影所はまことにお粗末で、ガタガタである。雨が降つていた爲に、餘計に惨めだ。それでも、行ききする人は多忙そうで、活氣がある。軍服姿の將校がうろくしてゐるので、はてなと錯覺を起したが、實は俳優達である。

「いや、どうも待たせましたね。北海道ロケの準備で忙しかつたものですから」

縁の太いロイド眼鏡越しに見られる目玉は、いつか戦艦大和を見た時の先生の艦長の凄さを思い出した。

「實は、モンテンプルの映畫について、先生にお伺ひしたいとおもひまして……」

「あゝ。あれはね。獨立プロダクションで撮影したものですからね、買手が無いまゝに、未だに公開されていないんですよ。勿論遺家族の集會なんか時はやつてゐる様ですがね」

「それは残念ですね。どんな内容のもので

すか」

「たしか、朝日新聞で出したと思うのですが、加賀尾と云う眞言宗の教誨師の手記を演出したものでよ。十四人の死刑囚の死刑に立ちあつた教誨師が、最後には悲しみのどん底に落されて慟哭するのです。極めて純粋な作品だけに、ミーちゃん ハーちゃん にはもてぬし、第一女が一人も出て来ないんですから、興業価値はないと言うわけなんですわね」

「先生の役柄は……」

「その教誨師なんですよ。まあ私も寺に育

つた一人ですから、満更でもないわけです。

しかし、本當は眞言宗ですがね、私は眞宗ですから、お經の出て来る所は、皆正信偈とか無量壽經をやつたものです」

撮影所の前にある小さな喫茶店で、豪快な笑ひ声で語りつづけられる先生の話は、とめどなく流れて出て来る。

「その時の感想はどうでした……」

「そうですね。一人一人の死刑に立ちあつ

て、十四人を送り込み、終つて佛壇で一人お經をあげて、泣きながら冥福を祈る場面がありますがね、この時だけは、感極まつて泣き崩れました。涙が自然に湧いて来るのです。目薬などはいらなかったですよ」

◎誓つて正覺をとらじ

「何と言いますかね。その時は四誓の偈を讀んだのですがね。『此の願満足せずば、誓つて正覺を取らじ』と云う文句がありますね。あそこですよ。若し、こうした罪ない戦犯がですよ、彌陀に救はれないとするならば教誨師としての私は、斷じて、この比島から去らないぞと言う様な感じがしましたね。そして、若し、こうした人々を救い得ないとするならば、この偈文を説いた彌陀は嘘だとまで思いましたね。全くその通りと思いませんか」

一氣に此處まで言はれた先生の語氣は、誠に荒々しく強い。恰も、再びその時の演技をこゝで又やつて居られる様な様子でもあつた。

「そうした映畫は是非一度全國の人々に見せたいものですわね」

「私も、勿論それを願つています。しかし已にモンテナルバの夜は明けました。死刑も生き残つた人々は、許された様ですし、この



映畫自體は、もう時候ものとして、ずれて來ましたから。しかし、私としては、仲々熱を入れてやつたものと信じている作品ですよ」

◎戦艦大和と死を共にして

「同じ戦争ものでは、この間の戦艦大和の艦長も、仲々好演の樣でしたが」

「あゝ、あれですか。まあ私の性にあつた役柄でせう。意志の強い、冷靜な役が、まあ私の役柄すかな、ワッハッハ」

どうも豪快である。大和艦と死を共にするとき、部下を去らせ、自分は、身を艦に縛りつけて沈んで行くのである。この點を一寸叩いてみた。

「あそこはね。原作では、ビスケットをかじりながら鼻歌を歌つて沈んで行くんだがね、餘りとつてつけた古武士的風情の樣なのでね、嚴肅に死ぬことにしたんだよ」

「仲々あゝした演技は難しいでせうね」

「そうだね。芝居だと、ずーつと續けてやるから、氣持ちが連續的に維持出来るがね、映畫では斷續的なもんだから、その境地に達

するのには困るね。セットの都合で、前後がメチャクチャなのだからね」

「先生の舞臺生活は……」

「これは大分古いものです。大震災前後から舞臺には立つていますから。映畫には戦後出る様になつたのですがね。」

「どちらが難しいですか」

「どちらも難しいですよ。始めは、それ程でもないんですがね、だん／＼深入りすると難しくなつて來ます。解つて來ると、それだけ難しくなるんですね。極意に達するなど、大變なことですよ、何も同じ事でせうがね。」それは御謙遜の言葉と拜したが、如何なる世界に於ても、「分つた、分つた」等と言つているときは、未だ分つていないのだから。「知るを知るとし、知らざるを知らずとす。これ知るなり」と言う孔子の言葉が、思い出されて來た。

「又北海道におでかけですか」

「えゝ。これはつまらぬ戀愛ものです。『リラの花咲く』とか言うものでね。」

撮影所の自動車で送つてもらふことゝし

た。車中、製作部の人と論談これ務めて居られる事を、盗み聞いていると、シナリオも書いてみたい、あの役もやつてみたい等と、仲々旺盛な意欲の一端を聞き知ることが出來た。

「北海道に二十日程行く爲、これからその分のラヂオ放送の録音を取つて來ます」

と先生は、街の中に、自動車で消えて行かれた。何かの物語らしい。

(Y)

笑話 音より速い

「世の中はスピード時代だね、ジェット機のコメントで此間一寸ロンドンへ行つてきた」

「ずいぶん速いつてね」

「うん、なにしろ、向うの飛行場へついて、しばらく待つてると、自分の聲が降りてくるんだ。」

佛

彦 克 寛

法學博士

私自身が佛についてどう思つて居るかを皆さんに聞いて戴く事はたいへん私の喜びとする所です。

一九〇二年私がドイツから歸る前に東と西の本願寺から留學生がやつて來ました。そして私が通譯してハルナツクの講義を聞かせました。あちらの佛教は小乗であつたが、日本に歸つたらどうしても佛教を學ぼう

と思つた。學生を連れて日本の美術品を觀に行つた時佛像に就いて何も知らないので全く恥かしかつた。それで歸つてから一人で研究したのだから間違つてゐるかも知れません。しかし一生懸命寢ても覺めても佛教の事を考えました。信仰の喜び佛に對する感謝は忘れる事はありません。そのお蔭で今日生きております。

さて、宗教は種々ありますが違つたものではなく精神は同じで正しい信仰は一つであるから一つの形式をとらなければならぬと思ふのは間違ひでせう。佛教はいづれかの形式をとつてゐます。ある教が偶像崇拜だと云う人があるがそれは間違ひで一つの高山に登るのにも登道がいろ

いろあるのと同じです。眞言宗の人は良く解るだろうと思ひますが「ア、」と云うこれだけの音に意味があると云ひますが、これも一つの行方です。佛の方から來たり自分の方から見たり兩方から見なければならぬ。我々は、自分に最もぴつたりと合う教の形式から、同じ一つの信仰へ入るのです。こういういみから、こだわらずに佛教を眺め味つてゐます。とくに佛教では信ずると云う事を種々な言葉で表はすが現在の心理學はおそらくそう云う事はやつてゐないのだらうと思ひます。たゞ佛教ではキリスト教のバイブルの様にこれさえあれば間に合うと云うものはない。佛教は難しいから解らない。その點は何んとかしなければならぬと思ひます。

人間は過去に永遠なるもの、未來に永遠なるものを持つてゐる。未來に向つて美わしい道を行こうと思ふ時には過去を見なければならぬ。人生は過去、現在未來の三世に連なるものである。この三世に渡つて、我々の心底にあつて、いつでも我々の心となり、我々の鏡となつて、自他を照らし、守つてくれるものを私は佛だと信じてゐます。佛とはこの人間の究極にあるもので、口に出して理屈の上からとやかく云う事は出來ない。しかしながら、それは自我に圍まれた過去、現在そして未來を通じて生きていく私共のいつでも、どこでも、守り手となり擔ひ手となる方であり、事實であります。この佛に守られて生きる私の日々を幸福に思つております。(大正大學水曜講演 齋藤昭俊記)

浄土俳壇

初心の方に

選者 高木晴子

川の岸に佇て、附近の景色を寫生することは其の句に、繪ではない本當の姿を、云ひあらはし、力強い立派な俳句が出来上るので御座います。

その個人々々の特長で、想像して立派な句を作られる方も、居られますけれど、特に初進の方には、こうした想像の句よりも、見たまゝを、其の場で寫生して、句作して頂きたいと、私は日頃思つてをります。

私の感じましたことを、少し申上げてみたいと存じます。

季題を入れて、唯五・七・五と言葉を並べると云ふだけでは、本當の俳句には、なつてゐないと、私は思つております。

も、生き／＼とした、動きのあるものは、出来ぬものです。川の流れに、それを喩てみますと、川の繪とか、寫眞では、美しい兩岸の景色とか、川の姿は、はつきり解りますけれど、自然を相手にして作り出す俳句には、此の繪の美しさだけでは、人の心をとらえることは出来ないと思ひます。

こうして、段々深く、俳句を理解して行つてから、主觀の入つた句も、又想像の句も、立派なものが、出来てゆくものだと思ひております。

も一つ、出来るだけ客觀的である、と云ふことが大事です。

自分の周圍から、季題を一つとらへて、其のものを、忠實に寫生することです。

本當の川の流れ、それには、しぶきが立つこともあるでせうし、水にのつて流れて來たものもあるでせう。兩岸の木々を吹き渡つてくる風など、皆自然の動きがあります。其の

自分の感情を入れて、主觀の強い句を作ることを、いけないとは申せません。唯今も申しましたが、深く俳句を理解してから、主觀の強い句を作りましても、自然の美しさの中に、あらはでない感情の入つた、句が出来る様になるのだと存じます。

素直に、あるがままの姿を、五・七・五にまとめてみるのです。

寫生を二の次ぎにして、机に向つて考へて作るのでは、其の出来上つた句は、美しくて

主観の強い句を拜見したとき、云つて居ることに同感して、強く引かされることがあります。でも、感情があらはに出されてゐて、人を引きつける様な句は、其の場だけのことで、すぐ色あせて、人々からあきらまれてくるのでは、ないでせうか。やはり客観的に、自然の風物を寫生して、あるが儘の姿を、讀みこんだ俳句こそ、長く人の心に残る、すぐれた句になるのでは、ないでせうか。

も一つ申上げたいことは、たつた十七字にかぎられた、字數なのですから、季題の重複は、出来るだけさけたいと思ひます。

頂度今頃ですと、梅雨と田植、蛙とか、まあ色々御座いますが、季節を同じくした季題を、わざ／＼二つ、此の短い字數の中に讀みこむ必要はないはずで。

字餘りのことも少し申上げてみますが、俳句が、十七字の文字であると云ふことは、七八百年、色々變化はあつても、連歌の發句にみなもとを、發した俳句が、連歌の發句が、十七字であるため、俳句が十七字であると云

ふことは、きめられた規則なのであつて、變えるわけには、ゆかないものなのです。

そして、日本の言葉が、七・五調になつてゐると云はれて居りますから、人の耳に調子よくひびくわけで御座いませう。

でも作る人の心持ちが、止めることが出来なくなつて、一字、二字、字餘りになつてしまふこともあります。これは字餘りの爲め、

直一その其の句が立流になることが御座いますから、一がいに十七字でなければならぬ、とは云えませんが、出来るだけ原則は守りたいものだと思つてをります。

時々、一字足りない句を見かけますが、これは大變、ぶざまなものですから、決して字の足りぬ句は、作るものではないと思ひます。

皆様の内で、初めて俳句を御作りになつて見ようと、思はれる方が御座いましたら、唯今申上げて参りました内から、季題、十七字、現代になつて強く云はれて來ました寫生、此の三つを、俳句の骨組みとして、御作

りになつて御らん下さい。

一人居の、ふとした時、又忙しく立働いてゐる時、汽車の中で退屈してゐます時など、ふと目について、心をとらはれたもの、美しいなと思つたり、よい景色だと感じたり、又反對に、ひどく醜く思はれた時などを、其の儘素直に寫生してみることは、心楽しいもので御座います。

夕立に走り下るや竹の蟻 丈草

夕立や膳最中の大書院 太祇

南瓜やずつしりと落ちて暮淋し

素堂

行く水や竹に蟬鳴く相國寺 鬼貫

風に乘る川霧かろし高瀬舟 宗因

供養

やさしい佛教の話



新保義道

供養のころ

問「佛様に御供養すると云う字は供え養うと書くのですね。佛様に供えたと云うことはわかるのですが、佛様を養うと云うことは一寸理解し難いのですが、どう云う意味なのでしょう」

答「仲々よいところにお氣づきになりましたね。仰せの通り供養は供え養うと書くので、供は自分が施してやると云うことでなく、捧げさせて頂くと云うことであり、養とは佛教では『供養するものは供

養される』と云われている通り、捧げさせて頂くことによつて、自分の心を養つて貰うと云うことなのです」

問「心を養うとはどう云うわけですか」

答「供養の精神は布施即ち施しの精神に同じで、布施供養することによつて、私達の誰でもが持つてゐる貪りの心、物おしみの心、物に對する執着の心を取り除くことが根本精神であります。そこで供えさせて頂くことによつて、私達の貪りの醜い心から貪りの無い清らかな心に養い育て、貰うと云う意味です。その外に信の

心を起させて貰うと云うこともあつて、要するに汚い心を清らかな心に養つて貰うと云うことなのです」

問「そうすると、供えたと云うことよりも養うと云うことに重點があるように思われますが、その點は如何でしょうか」

答「そう一概にも云えませんが、考えようによつてはそうとも云えるかも知れません。例えば懐中電灯とか提灯は闇夜にこそ必要ですが、太陽の輝く日中には必要はないのです。そう云う考へで八萬四千の光明を放ち給う佛様に『おひかり』をお供えする必要はないと云つてよいのです。そう云う意味からは供えたと云うことよりも養うことの方に重點があると考えてよいでしょう。しかしこの様な場合でもろうそくその他の光そのものを捧げると云うよりも、そのものを通じて自分の誠心を捧げるので、そう云う意味からは供えたと云うことにも決して輕んじてはならないことです。佛様にとつてはお花も、ろうそくも、線香も、食物も實際は必要でないのに拘らず、町重なお供えを勧めもし、又お互が出来る限りのお供えをさせて貰うわけは、第一にはお供えす

るものを通じて私達の誠心を捧げるのであり、第二はお供えすることによつて私達の心を清らかにして頂く爲でありますので、どちらかと云えば私達の方に中心があると云つてよいでしょう」

燈とお花

問「では具體的に一々お話しを願うことにして、おひかりについてお話し下さい」

答「極端な云い方かも知れませんが、大光明を放つて私達を照し給う佛様に向つて前世紀の遺物のような土器に油を入れた灯明や、停電の時にしか使わないろうそく、而も停電の時は太いのを平氣に使いながら佛様の前には細いのしか使わないろうそくをつくってみたところで、當に晝行燈に等しいでしょう。併しその意味はその光そのものはさゝやかであつても、私達の誠を捧げ、この光を佛様の光明と仰ぐのです。人間に限らず一切の生き物は皆例外なしに明るいう方へ向うものであります。光は私達の心に明るさを與えてくれるもので、色々の煩惱によるくら闇の生活、くらくら勝な足下を照して頂こうと云う心で、その光を通じて佛様の

光明に照された明るい生活をさせて頂く」と云う意味なのです」

問「『さゝぐみあかし』と云う歌がありますか、その意味ですね」

答「そうです、

今さゝぐみこのみあかし

誠の道をあかしたまへ

我がひかりとわにたへず

つたなき歩みてらしたまへ

この歌詩は友松圓諦師の神田寺の方が作られたのですが、簡単に要を得た歌なので、若い人や、兒童の集りにはよいものです。

問「次はお花について」

答「色とりどりの美しいお花や、造花の蓮華等を、お供えするのは、美しいお花を眺め、私達の心を清らかにし、信心を深めてゆくのです

信は莊嚴より生ず

と云う言葉があるように、新鮮なる美しい生花を眺めることだけで、清新の氣を與えられ、美しく莊嚴され、掃除の行き届いたお佛壇やお内陣を拜む時、理くつなしに有難い氣が起るものです。お花そのものを供えるところに意義のあ

ることは前と同じです」

問「佛教では必ず蓮の花を用いますが、それはどう云う理由ですか」

答「皆さんも御承知の様に、蓮は泥沼の中から出て而も泥に汚されず、よい香をあたりにたゞよわせ、その清らかさを保つてゐるものです。私達も煩惱の泥沼の中に生活しながら、煩惱に汚されず清くありたいものだ、と、佛教では蓮をやかましく云うのです。

觀無量壽經の中に、

念佛申す人は、人間の中の白蓮華だと説かれています」

焼香について

問「ではお線香や焼香について」

答「佛教では

香は佛の使なり

と言われているものです。なるべくよい香りのするものをお供えしたいものです。あのすがすがしい香は、私達の汚れた心を洗い清めてくれるもので、このよいなよい氣持が、私達を佛の世界へ導いてくれるものであります。香を兜に焚きしめた古武士の心掛、よい香りこそ一切

の悪臭を消してくれるものです」

問「香について思い出したのですが、葬式等の時焼香する時は何返するのが本當か迷うのですが、何返するのが本當ですか、又線香は何本立てるのが本當ですか、何本でなければいけない、何本立てたらいけない等とよく云われますが」

答「何本でなければいけない、何本立てたら何とかなるとよく云うのを私も聞きますが、あれは全く迷信です。よく線香を而も餘り上等でないものを一把のまゝ火をつけて立てる人がありますが、狐でもいぶし出すように全くけむくてやり切れません。恐らく佛様もくしやみでもして居られることでしょう。之は冗談ですが、普通には線香なら一本か、二本か、三本焼香の場合も一返乃至三返とされていきます」

問「それは何か意味があるのですか」

答「一本又は一返は私達の一心を表し、二本又は二返は戒香と定香、三本又は三返は私達の身と口の心を悉く捧げて供養すると云う意味で、その何れでもよいのです。葬式等の場合多くの人々が後で待つているのも構わずに、ゆつくり三返する人もあ

りますが、そのような場合には時間の關係上眞心こめて一返されるのがよいでしょう。又線香も悪いものを澤山立てるより、よい線香を一本乃至三本立てられるのがよいと思います」

問「食物はどのようなものを、どのような氣持でお供えたらよいのでしょうか」

答「私達が日常頂く食物の中から清浄なるものゝお初を選んで、佛様にお供えすればよいので、又他からの到來物は必ずそれをお供えしたいものです。尚日常は必ず御飯とお水をお供えしてほしいと思います。又命日その他特別の日には色々とお供えするわけですが、之もそれらの物を通じて私達の誠心を捧げるのです」

問「一々について詳しく承りましたが、ひとつるめて心構についてお話下さい」

答「一口で云えば、お供えする物そのものが問題ではなく、その心掛が大切なのがす。一例を香にとつてみても、佛様にしてみれば恐らく少々よい香りのする線香をお供えしても、又少々悪い線香でも、どうせ人間のすることです五十歩百歩、大した異りもないでしょう。又人間から香を供えて貰わねばならぬ必要も無いでしょう。

う。唯そのものを通じて私達の心をお受取りになられるのであります。そこで私達としては、自分の力に應じて出来る限りよいものを供えさせて頂くとともに本當の意義があるものです。

こんな高價な線香を供えるのは惜しいと云う氣持からなら、何千圓何萬圓と云う如何に高價なもの、得がたいもの供養であつても、尊い供養とは申されません。それに反し、非常に貧しくその日の生活にも困る人が、たとえ一圓の線香でも、誠心から

『もう少し位はよいお線香をお供えさせて頂きたいのですが、何しろ食うや食わずの身の上ですので……』

と佛様に對し、すみません、こんなもの勿體ないのですがと云う氣持でお供え出来れば、この方が非常に尊い供養なのです。又前にもお話した通り、貪りの心を除くと云う點から考えてもおわかりのよう、供養することによつての『おため』を考えないと云うことも大切なことなのです」

「おため」のない供養

問「おためを考えないと云うことはどう云う意味ですか」

答「それはお下りを當にしないと云うことです。お菓子その他の食物のお供えは、お下りはどうせ自分達の口に入るのだからと云う氣持で、割合にし易いものです。それに比べて、全然お下りを當に出来ない線香とか、ろうそく等と云うものには案外お金を出し難いものです。お花も大してお下りは當に出来ないものですが、時によると、餘り萎れていない美しい花は机上の一輪ざし等に利用出来るものです。そこで昔から佛前供養で最も尊いものは線香とかおひかりだと云われているのです」

問「今までは佛教に對する供養について承りましてよくわかりましたが、死者に對する供養について」

答「死者に對する供養も佛前に對する供養と同じことなのですが、そこには追善・追孝と云う氣持があります。

孝行をしたい時には親はなし亡くなつた大恩ある親や御先祖、幼くして世を去つた我子に對し、肉身いますが如く直接をつくすことも、又愛情を以て

いつくしみ育て、やることも出来ない。せめて自分の氣持だけなりともつくさせて頂きたいと云う氣で出来るだけの供養をさせて貰う。

問「そうしますと、供養は大別して佛様に對するものと、死者に對するものとの二つに分かれ、更に死者に對するものは直接死者に對するものと、間接に縁ある人に供養し、それをふり向けることの二つになるのですね」

答「そうです。そこでこの間接的なものについてもう少し詳しくお話をすると、私達平日の生活は、生活そのものに追われ貪りの心ばかりの生活をしているものです。又實際程度の差こそあれ、慾の氣持がなければ商賣も何も出来ないことになります。従つて生活そのものが出来ないことになります。平日は多くの恵みを受けての生活であり乍ら、慾と慾との生活で、他人にも御迷惑をかけ通しである。

『今日は親の命日だから』

せめて今日一日は慾を離れて、多少なりとも出来る限りの供養をさせて頂きましょうと、縁ある人々に對し心からなる供養をさせて頂いて、その功德を亡き人の爲にふり向け、又自分自らの貪りの氣持を取り除いてゆくことに努力すると云う

のがその心構です」

問「お盆の精神もやはりこう云う意味ですか」

答「仰せの通りです。お盆の起りは、お釋迦様のお弟子の目蓮と云う方のお母さんは非常に慾深かたで、何一つ施しをしなかつた。その爲死んで餓鬼道の苦しみを受けていた。孝行深い目蓮は、何とかしてお母さんをこの苦しみから救いた。ものだと、お釋迦様におすがりした。お釋迦様は『お前の母は罪深いのでお前一人の力で救うことは出来ない。七月十五日は佛歡喜の日で三ヶ月の修養の終つた多くの坊さんが四方に出かける日であるから、その多くの坊さんに飲食の供養をするならば、その功德でお前の母は救われるであろう』

と仰せられたので、その通りにして母を苦しみから救うことが出来たと云うのである。

更に目蓮はお釋迦様に向つて『後世の人でも自分と同じようにすれば父母を苦しみから、救うことが出来ましょうか』と尋ね、お釋迦様が

『後世の人でも又そのようにすればよろしい』

と答えられたと云う故事によつて、今日迄お盆の行事が続けられて來ているのであります。

多くの人に對する供養の功德を死者にふり向けると云うことがお盆の精神であります。」

心 眼



藤 田 寛 海

立體映畫によると、畫面の森や林は今までと違つて奥ふかく感ぜられ、遠くつゞいた街路や豪壯な建物も、總ては實際そのまゝの立體觀を與へるといふ。

また一方、ソ聯では匂ひをもつた映畫が上映されて、スクリーンの花園は馥郁とした芳香を客席にたゞよはせたといふから、實感は更に深められ素晴しかつたに違ひない。

けれどもまた、雨の光景が映寫されたときには、客席一杯に濕氣がみなぎり、觀客は雨具の用意をせねばならぬと云ふことだから厄介である。若しも、暴風雨や晴天、或ひは四

季とりどりの風物が次からつぎに寫し出されたならば、觀客は疲れきつて、後しばらくは休養せねばならぬでもあろう。

未だ映畫が無聲で、たゞ黒と白の色彩しかもたなかつた時代にくらべて、トーキーや天然色映畫が生まれ、今また立體觀や匂ひを與へるものが作り出されるやうになつたことは、確かに科學の輝かしい進展には違ひない。然しそのために一層觀客が苦痛や不便を感じるというのでは、却つて最負のひき倒しといはねばなるまい。

昭和の初め頃にトーキーが現はれ、映畫が音をもつようになつたことは、當時としては大きな喜びであり、また驚きでもあつた。そして此の頃では、映畫の有聲・無聲はすでに比較ではなく、トーキーを珍しがる方がむしろ驚くべきことゝさへなつてしまつた。

近頃、ある會合で久しぶりに無聲映畫を見

る機會にめぐまれた。終つて暫く、みなで活動寫眞の話に花をさかせ、「カリガリ博士」とか「デキル博士とハイド氏」と云つた「活動寫眞」や「活動」と呼んだ方がシツクリするやうな昔を懐しんだが、トーキーに親しんだ今では無聲映畫は何んと物足りぬものだらうと、一同は索莫とした想ひにとざされたのであつた。

その昔、無聲映畫の時代には、映畫館のはの暗い土間からの音樂にのつて、スクリーン一杯に咲きほこる櫻や岩をかむ怒濤が寫し出されたとき、人々はその聲なき畫面から花の香をくみとり、怒濤のざわめきを聞きとることができた。

然しそれから二十餘年、今のわれわれは、音をもつものはその音を色を、伴ふものはその色を、あからさまに表示されねば心の琴線をかきならす事ができぬやうになつてしまつたのであらうか。

それにつけて想ふのだが、此の頃の若い人たちが「お経は聞いてゐてもよく分らぬから有難味がうすい」と云ふことである。

もともと、たゞ聞いてゐるだけで經文が分

らないのは今に始まつたことではないだらう。けれども、昔の人たちは分らぬながらも讀經の座に列ることによつて、云ひしれぬ清らかさを感じ、靜かに己れをかへりみ、或ひは「こは何處の佛の御國などに來にけるにかあらん」と云つた法悦にひたつたのであつた。これはまた、餘韻をなつかしみ、餘韻に心うたれる姿とも云ふことができやう。

そして、此のやうに餘韻や餘情にものゝ生命を見いだすことこそ東洋風の特色なのである。

例へば書道に於ても、「ニ」といふ文字はたゞ二本の線をならべ記すことによつて、誰でも作り出すことができやう。しかし、弘法とか行成と云つた能書家と子供の書いたものとは自から巧拙の違ひがみとめられる。この場合の「うまさ」といふのは、二本の線が定規を使つたやうに眞直ぐであるといふ意味では勿論ない。「二」の上の「一」を書き終つた筆が、空間でどのやうな美しい曲線を描きながら下の「一」へと連るか、つまり肉眼で見ることのできる二本の線をたよりとして、見えざる空間での美しい曲線を心で感得すること

とが、書道に於ける鑑賞の基調なのである。戦後しばらく書の道が顧みられなかつたのも、この見えざるものを思念する心の巾とりを人々がもちえなかつたに他ならない。

昨今の若い人たちが經文そのものを目で見て聞き知識として先づこれを知らうとすることは知的態度と云へるかもしれない。

知らうとする努力は尊く、究めようとつとめる姿は美しい。然し總ては肉體によつてのみ知ることができるとは限らない。心によつて見、また心で聞くものゝあることを忘れてはならない。

トーカーが更に色や匂ひをもつに至つた科學の進歩のために、想像力が弱められ、心眼が覆はれてその輝きを消すならば、人々にとつて此の上もない不幸と云はねばならない。

人間世界に於ては知と情そして意の三つが同じ歩調で進むことこそ望ましい。

あの戦争といふ、意志的なものゝ強調された時代がどんなであつたかを苦々しくも想ひ起すのである。

知的の方面の先走りもまた同じである。だから漱石も云つてゐる「知に働けば角が

たつ」と。(山讀形大學助教授)

パチンコ人生

パチンコの名人曰く――

パチンコも又人生を考えさせてくれる。人多しといえども、大同小異の形體を以つて世に現われてくるが、等しく穴の中に入つて姿を消してしまふ。次の子を二つ三つ或は一ダースと生んで地表から没する。パチンコの玉もそうである。運のよいものは、すばりと幸福の穴へとびこむが、そばで、まどろ／＼しているうちに時が來て、空しく下つていくのが多い。パチンコ屋に通つているうちに、なじみになると、おまけの玉を出してくれることがあるが、それは大して面白くない。やはり、興味は、あの入るか、入らぬかのスリルだ。人生は、我が人生をかけてのかけごとだからだ。やりなしのないスリルに満ちた日々だ。しかし、あのうろ／＼とまどろ／＼と空しく零となるたまを見てると、憂ひの哲學だね。



一枚起請文

佐藤賢順

一枚起請文の終りの一節は

念佛を信ぜん人はたとい一代の法をよくよく
學すとも、一文不知の愚鈍の身になして、尼入
道の無智のともがらに同じうして、智者のふる
まいをせずしてたゞ一向に念佛すべし。

というのであります。佛の本願を信じ佛の御名を稱えてそ
の導きにすべてを任せる人は、僅かの知識を誇らず、限り
ある才能にのみ頼らず、一文不知の身になつて、無智なる
者、愚かなる者と同じ心で、念佛せよ、という教えです。
尼入道の無智のともがらとは、別段、出家するでもなく、
家にあつてそのまゝ髪を剃り、尼となつてひたすら念佛を
勵んで後生を願つてゐるお婆さん達のことであります。

さてしかし、學問の自由を尊び、日夜、新知識の吸収に
努力することは、現代人の、特に若い人達の誇りでありま
す。長い間、學問を修めた者が、その修得した知識をにわ
かに捨て、一文不知の愚かな身に還えれといわれても、
そんなことができるでしょうか。一度得た知識は捨てよと
いわれても、捨てることができないものです。一文不知の
愚鈍の身になしてというのは、一度得た知識を捨てよとい
うのではなく、知識だけに頼ることをやめよ、知性の限界
を知つてこれを超越せよというのであります。法然上人は
一切經を讀破すること五遍に及び、その當時、肩をならべ
る者のない學者でありまして、「智慧第一の法然房」と評
判されました。自らも亦「勢至菩薩の再來」であるという
自信を持つていました。勢至菩薩の再來とは智慧の權化、

知性の象徴しやうちゆうという意味でありますから、上人が學問研究や眞理探求を疎おろそかにしたのでないことは言うまでもなく、その方面では一般の人の何倍かの精進しやうじんを續けたことは勿論であります。しかしその人にしてなおかつ知識の限界げんかいにぶつかつたのであります。いや智恵第一であつたからこそ人間の知識が至る所で限界にぶつかり、至る所で挫折することを知つたのでありまいよう。丁度現代の科學者が優れた科學者であればあるほど、科學の限界というものを知つてゐるのと同じであります。もし智恵第一でなく、わずかな知識を誇らし氣に振り廻して、信仰の世界のことも何もかも知識で割り切ろうとするただの物識りであつたとすれば知性の限界には氣ずかなかつたでしよう。

中國の曇鸞どんらん大師は既に六世紀に人間社知性の限界に氣付いて、何事かについて知つてゐるということは、その他のことについては知つていないということであり、何事も知らぬということは、知らざるところなしということである。「無知にして知るはこれ眞智なり」といつています。

前々回に、口稱名號のお話をしましたときに、法然上人が念佛を稱名であると斷定したについては、ありのまゝの人間の見極め、偽いつはりわらざる人間探求が根柢になつていたと述

べましたが、上人はこの如實なる自己反省を唐の善導大師から學んだのであります。善導大師の人間觀は、「決定けつじやうして深く信ず、自身はこれ煩惱具足ぼんのうぐそくせる凡夫なり、曠劫こうきやくよりこのかた常に没もちし常に流轉りゅうてんして出離しゆりの縁えんあることなし」というのでありまして、その意味は、率直に自己の姿を眺めるとき、私という人間は決して優れた能力を持ち高く評價される人間ではなくて、「煩惱具足の凡夫」であり、生死流轉しやうじりゅう（まよひの世界をぬけきれずに生活すること）身である、というのであります。法然上人はこのような考え方を受け繼いで、自らの姿を、「我はこれ烏帽子えぼしもきざる男（官位のない男）なり。十惡の法然房、愚癡ぐちの法然房が念佛して往生せんというなり、」と述懐じゆっかいせられました。その他、「智恵の眼、盲めくらい、行法の足、なえたるこの頃の我等」であるとか「わが身罪重くて無智なれば」とかいう言葉は上人の法語の隨所に見出される言葉であります。

凡そ佛教には大きく分けて二つの型の人間の見方があります。一つは人間が持つてゐる性格を高く評價して、人間には誰れにも佛性ぶつじやう——佛の性質があつて、人は何人も修行によつてこの貴い佛性ぶつじやうを開顯かいけんすることができるといふ考え方があります。めいめいは可能性として或は本質として

佛性を内に藏しているといふのです。第二の型は、たとえ人間にそのような貴い本質があるとしても、現實のありのまゝの人間はとうていその可能性を實現する力はない、人間の實際の姿はそれほど高く評價できるものではない、無智と罪惡の泥沼にもがき苦しむのが人間の現實である、といふのであります。法然上人の人間觀は勿論このうちの第

二の立場でありまして、このことを上人は、「聖道門（第一の型）の修行は智慧を極めて生死を離れ、淨土門（第二の型）の修行は愚癡に還りて、極樂に生る」といつております。現代の哲學的人間學や實存主義は人間の持つ可能性の實現とか、人間の現實の在り方の追求とかを目ざしているものでありますが、これらの現代の思想のうちにも、丁度いま述べました二つの型に相當する區別が認められます。人間を神と惡魔との中間者、全體と虛無との中間者と考へることは近代の人間學の共通の考へ方でありまして、その中間者という意味も固定している動かぬ中間者ではなくて、神ともなれば惡魔ともなる、全體ともなれば虛無ともなる、という浮動する中間者であります。この考へ方は人間の中に神の可能性を認めるので、シェーラーやヤスバースの人間解釋がそれであります。こういう聖道門的な見

方のその反面において、人間を不安、孤獨、絶望のうちにある存在と考へる考へ方もあります。キェルケゴールやサルトルがそうであつて、これは淨土門的といへましょうか。極端に言えば、現實のありのまゝの人間の姿を見極めていふという點では、サルトルの人間觀には法然上人のそれと一脈相通するものがあるといへるでしょう。

それはさておき、法然上人は善導大師からこのような人間觀を承け繼いで、自らを罪惡深重にして無智の者と見極めたのであります。「智慧第一の法然房」が自らを反省するとき「愚痴の法然房」でありました。知性の計らいを越えて一文不知の愚鈍の身に還れと教えたのです。昔、曇鸞大師が教えた無知にして知る、これ眞の智慧という思想が、善導大師を通して、このようにして法然上人において實を結んだといえるのであります。

こうして一文不知の愚鈍の身に還つて、本願（佛の御名を稱へる人はすべて、之を救わんという御佛の御誓願）を受け取るとき、本願は初めて力強く仰がれるのであります。これを「本願の不思議」と申します。不思議といひますと、一般には奇妙だとか不可解だとかいう意味に用ひていますが、不思議といふのはそうではなく、人間の知性に

よつて理解することができない、理性を超えている、という意味であります。上人がしばしば「本願の不思議を疑わせ給うべからず」とか、「本願の不思議にて念佛だにも申せばいずれもみな往生するなり」とかいう法語を残しておりますが、本願の世界は人間的知性をもつては付度する（おほうたく）ことができないということを語っているであります。知識の立場を超えて率直に本願を仰ぐとき、本願の力は大悲本願力とか大願業力とかいうに相應しく、いよいよ力強いよいよ温かく仰がれるのです。罪惡深重であるとか十惡五逆であるとか、煩惱熾盛（しじようさう）であるかと、黑白も知らざる童（わらわ）の如くとか、愚痴、愚鈍であるとかいうのですから、淨土教の人間觀は決して明るく楽しいものではありませんでした。が、すべてを投げ捨て、本願に歸命するとき、そこには如來の大慈悲に抱かれ限りなき光明に包まれた新しい人生が開かれるのであります。念佛の信仰はその出發において、知性の頼りなさに絶望し、かつて犯した諸の罪に戦き、これからいつ何時（たんととき）犯しかねないともわからない惡に不安を感じ、しみじみと人間のはかなさを味つたのでしたが、それは近頃流行の一部の實存主義のように、憂鬱で暗黒な人生の面を見るだけに終つてしまふのはなく、そのような頼

りなくはかなき人間であるが故にこそ、大慈本願に抱かれて、歡喜（よろこび）にあふれ光明に輝く人生に生きることができるといふのであります。

念佛信仰の意義は念佛者がどのように日常の生活にその信仰を現わしているかという實際的な點にあるのであります。法然上人に「生けらば念佛の功つもり、死なば淨土へまいりなん。とてもかくてもこの身には、思いわすろうとぞなし」と思いぬれば、死生ともにわすらいなし、という法語がありますが、現實に拘泥（こだわ）らず現實を忘れず、如來の導くがまゝに楽しく明るく生きてゐる念佛者の日常生活をこれほどよく示している言葉はないではありませんか（完）

（大正大學教授・NHKからの放送の要旨）

新維持會員（敬稱略）

横須賀市	長安寺
横濱市	良忠寺
東京都	高野健二
	靈岸寺

右、御芳名を掲げ、感謝の意を表します。

法然上人鑽仰會



女御出家

吉賀敬吾

都は東山鹿ヶ谷

住蓮坊、安樂坊の草庵に

朝露ふみて詣で來し

花もはぢらふ女性二人

夏の暑さも涼しむる

梵行に耳うち傾け

涙しとゝに咽び泣く

若き上皇后鳥羽院寵愛の

同じ血を別けし姉妹

姉は松虫の局年十九

妹は鈴虫の局年十七

上皇熊野にいでませる

留守を忍びの事なりし

先ごろ二僧の師源空上人が

清水寺に説きましゝ

出家功德經の法話を聴き

果報うたはる現在の身は

女の生くべき道なるか

虚榮と名譽の憶れは

女の希望の總てにか

宮居づかへに一生涯の

自由をもち得ぬ慣習に

何幸福のあるべきぞ

淺猿しきは我が身空なれと

遁世の志止みがたく

いと懇ろに、いと切に

出家受戒のほどを頼み入る

二僧諾ひなば後難免れじ

否み拒まんか我れと我が

生命を縮め斷ちやせめ

とつおいつ遂に意を定め

丈けなす黒髪剃り落し

色ある衣を墨染めの

衣に替えさせ數珠もたせ

得度の式をぞ済ませける

今し、變り果てたる態ながら

清くも品ある尼姿

顔ひ叶ひし姉妹

蟠まる、心の惱みを救はれて

都を後に遁れ出でけり

上皇還御まして聞召し

世にも口惜しう憤らせらる

側近の人々事は女性にかゝはること

深くな咎め給ひそと

彌陀の名號唱ふるを禁じ

二僧が不埒叱りおくに取爲せり

上人おのづから憤みの

小松谷の僧坊に閉ぢこもり

靜かに念佛餘念なし

勸、勸の二僧秘かに訪れて

師の坊の安否たづぬうち

月の深更の歸り途

五條内裏近く眼につける

淨土念佛禁止の建札

我れを忘れ唸るが如く

「世も末ぢや、輪王位高く樂み多けれど、

七寶久しからず五衰早くも現ず、南無阿彌

陀佛、南無阿彌陀佛、南無阿彌陀佛」

共に音聲高々に唱え叫びたり

忽ち檢非遣使役人に捕へられ

上をおそれぬ重々の不届と

近江國馬淵暖において

稱名念佛數百遍

鎗の穂先の露と消えぬる

讀者のページ

◎毎度お手数煩はし恐れ入ります。六月號、老の瑠訓、一枚起請文、お親音様の御事等ありがたく再三、拜讀さして頂きまして。どなた様のお歌が失念いたしました。しました。

「今きいて今に忘るる身なれども南無阿彌陀佛のこるうれしさ」

このお歌に日々をよるこんで過して居ります。誌代一年分お送り申上げましたどうぞよろしゅう御とり計らひ下さいまし。皆様の御元氣でお働きのほど念じ上げます。合掌

(千葉・柏町 矢野ふみ)

◎浄土誌此頃の内容は愈々充實編輯の御苦心に感謝致して居ります。然し尙、懇を言えば、どの一冊を手にしても法然上人の御教に觸れられる様な内容のものを欲しいと思ひます。道を求める人々に願けてやつても元祖の念佛を受取るには一寸見當がつかぬ様です。宗門誌はこれより外ないのですからもつと法然主義をムキ出しにしても良くないでしようか。

(岩手・花巻町・廣隆寺)

芝園だより

◎お盆と施餓鬼が終つて、ホッとしたところに電話。今月こそは巻頭言と後記をとの、きつい命令。それも校了、切までの滑り込み。尤も、毎月、形が出来上がるまでのプロセスは逐次報告はうけて、大體の出来栄えは豫想出来るが、編集なんでものは水もの。その時に従つて仕上りも異なる。ところで今月は？

◎これが出る頃までには、きつと會から東京寺院―特に前金切れのところには、御挨拶に伺つていふことと思ひますが、これも背に腹の代らぬ證據。何卒御許るし下さい。

◎それに關連して、月末には鎌倉大佛にて謀議の豫定。といつてもムホンではなく、どうしたら浄土がつづくかの相談。お盆だセガ鬼だとお寺の景氣はよそに、本音を吐けばこちらこそ正に施餓鬼の必要ありというところ。

◎天光院の芝幼稚園、いよいよ三百萬圓にて夏中に完成とのこと。五年前の二十萬圓のボロ幼稚園がうらやむこと甚だしい。(竹中)

◎モンテナルバから戦犯達が華々しく歸つて來た。悲喜交々の情景

が報道されている。敢えて英雄視する必要はないが、御苦勞様であつた。この際もう一度反省してみれば必要があらうこの機会に佐々木先生を訪ねたことはヒットでした。近々映畫も上映されるとか。◎集鴨の田端正雄氏が、浄土五月號に發表された糸繻を懇々持参され、拜見する機を得た。讀者各位に血の結晶をお目にかけられないのが残念。

◎水庵が日本全國を襲つて居る。讀者の中にも、この苦に會つて居られる方もある事でせう。衷心御見舞申上げます。

◎病床日記の内山知也氏は、東京文理大出の少壯學徒です。學半ばで倒れて、尙且つ學と人生とに關ひ續けて居られます。

◎横須賀の玉木辨戒氏の幼稚園はその廣さに於ては關東隨一だらう内部も着々整備されている。浄土にも陰に陽に御支援頂いていふ。その活躍振りは大したものですよ。

(安居)

◎出版バニツクの話もちよい／＼聞く、いつもぼつとせぬ出版界である。本誌は想像に絶した努力にその中を切抜けてきた。何分とも維持會員、會員の御つれを御紹介下さい。

◎トラクトが喜ばれているが、中でも信徒必携は手頃な教科書といふので、よく出る。

◎本會は發展と共に次第に業務が

多くなつたので、業務部を新設、大正大學國文學科學生の梅津和夫君がはりきつて椅子に坐つて居る◎先月號に本欄の教學院講讀會の記事に、大野法道先生が大無量壽經をとあつたのは誤りで、阿闍梨達先生が無量壽經を訂正します◎新保義道氏は知恩院布教師で活躍。先日、案外、「浄土」を知らない人がある、宣傳せよとの忠言(龍海)

誌代 會費半ヶ年二百圓、一年四百圓(十共)。毎號定價三十圓、前金切次第清算通知申上げます。確實便利な振替を利用して下さい。

「浄土」 八月號

昭和十年五月二十日 第三種郵便物認可

昭和廿八年 七月廿五日印刷 昭和廿八年 八月一日發行

(定價三十圓)

編輯 眞野正順

印刷人 春山治部左衛門

印刷所 共立社印刷所

發行所 法然上人續仰會

東京都千代田區神田神保町一〇
電話・芝(四三)一三二八

御袈裟法衣御調進

○錦金襴

○特種織物

○御水

○御打敷

○御幡

○稚兒衣裳

御法要に梵鐘供養に新装の稚
兒貸衣裳を精々御下命の程を

増上寺 宗務所 大正大學 芝中高校 淑徳學園

御用達

野村法衣店

電話芝(43)〇四二八番
振替東京七八九四五番

昭和十年五月廿日第三種郵便物認可(毎月一四一日發行)
昭和二十八年七月廿五日印刷 昭和二十八年八月一日發行

第十九卷

八月號

定價金三拾圓(送料)

淨土トラクト

B六、十六頁 價十圓送八圓
五十部以上 二割引
百部以上 二割引

淨土編集部編

信徒必携

信徒としてぜひ之だけは知っておきたい「淨土」の
みおしえ・みほとけのこと・お念佛・信徒のつとめ・
其他・佛壇・香・珠數・木魚・おけさ・佛式作法一通
りを丁寧に説明したもの、

藤井實應著

一枚起請文

宗祖信仰の本質を、新しい思想と深い體驗によつて、
かんでくだいて説かれた念佛信仰者必見の書

淨土シリーズ

文庫版四頁二圓 百以上一、八圓
三百以上 一、五圓
送、五十部 每八圓

大野法道著

五重の^{こじゅう}話

本宗入門の式である大切な五重とは何か、何を伝え、
どんないみがあるのか。大野博士が特に平易に解説さ
れたもの。五重宣傳のチラシ、又は、授講者施本とし
て大へんよろこばれています。

法然上人鑽仰會